

優秀賞

## 頼り頼られる仲間

宝塚市立中山五月台中学校 2年 奥山 稜泰

この経験は僕が中学校一年生になった頃の夏の野球の練習試合の事でした。一アウト、ランナー1塁で、バッターは僕。エンドランのサインが出ていた。エンドランとは、ランナーが走り、バッターがゴロをころがして、ランナーを進める戦法である。当然、僕は、ゴロをころがさないとダメだ。だけど僕は、ランナーを信頼出来なかった。

「ちゃんと走るのかな?」

「失敗するのは嫌だ」

そんな事ばかり考えていた。そう考えていた時、ピッチャーがボールを投げてきた。僕は、バットを振れなかった。

「ストライク」

と、審判の腕が上がった。そのせいで、ランナーも飛び出し、アウトになった。

「ちゃんと信頼してくれてたんだ」

申し訳ない気持ちしかなかった。

その直後、先生に呼ばれた。そして、怒られた。悔しかった。この試合が終わるまで、僕は絶望感に満ちていた。

家に帰り、この出来事を、お風呂に入りながら、振り返った。

「先生は僕達を信頼して、このサインを出したのに、僕のせいで…」  
気づいたら自分を責めていた。

この出来事を家族に話した。母はこう言った。

「挑戦して失敗するのと、何もしないで終わるのと、どっちがいい?」

この言葉で僕の考えが変わった。僕は何も言えなかった。その日は「ありがとう」と言って寝た。

次の日も練習試合だった。僕が着がえている途中に母が来た。そしてこう言った。

「昨日の言葉、覚えてる?」

と言った。もちろん忘れるはずがなかった。

そして、玄関に立った。僕はこの言葉を胸に玄関からの一歩を踏み出した。